

江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当・川辺太郎

今回は、前国立公園研究所長の親泊教授時代、親泊ゼミの学生だった川辺太郎氏の卒業論文を短くまとめたものを紹介する。

ウィルソンズ・プロモントリー国立公園は一八九八年に設立され、ビクトリア州に現存する中では最古の国立公園である。本論文では、本国立公園の成立過程を明らかにし、その中にアメリカの国立公園理念が組み込まれていることを指摘する。

失われた風景と自然保護運動

ビクトリア州都メルボルンから南東に約二〇五kmのところを位置し、バス海峡に面した半島一帯、約五〇五kmが国立公園に指定されている。海辺は観光客で賑わうが、内陸には熱帯林や湿潤なユーカリ

林も存在し、さまざまな生態系によって構成されている。

一八五一年、ゴールドラッシュによってビクトリア植民地には人々が押し寄せ、一八六〇年代には農地開拓や宅地開発が行われるようになった。また、産業やヨーロッパの風景創出のため多くの動植物や狩猟鳥獣が移入された。このためオーストラリアの手つかずの自然は一気に姿を消して行った。残された自然は主に産業利用のために、一八五九年に設立されたビクトリア王立協会 (Royal Society of Victoria) を中心に研究が行われた。一八七〇年代にはオーストラリアでも自然保護運動が芽生えた。一八八〇年には王立協会のメンバーを中心に、Field Naturalists Club of Victoria (以下FNCV) というオーストラリア初の自然保護団体が発足した。

移住計画と自然保護の対決から国立公園指定へ

一八八七年七月、政府の土地大臣は、ウィルソンズ・プロモントリーに一、〇〇〇人規模の移住の申し入れがあったことを新聞に公表した。

FNCVのメンバーのジョン・バースレム・グレゴリーはこれに反対し、この土地の地質は耕作や牧畜には不適であると述べた上で、観光地としての価値は十分にあり、将来的には動植物を絶滅から保護することと観光地を両立する、アメリカの "national park" のようにすべきだと主張した。

FNCVは国立公園として保護するための運動を始め、一八八八年と一八九〇年の二回にわたって、この地を動植物の保護、レクリエーション、そして漁場の保護の目的で国立公園に指定する請願書を土地大臣に提出した。その結果、ついに一八九八年に国立公園の指定を受けることとなった。

本音と建前

これ以前、ビクトリア州では一

八六〇年代の土地開発によって、金の採掘を生業とした鉱夫たちは大打撃を受けた。また、金鉱山の採掘方法が変わり、木材消費が増えた影響で木材の価格が高騰していたことから、金鉱山業者等で組織された委員会は州有林の設立を政府に提案し、約二〇年の歳月をかけて州有林の数を増やすためのロビイングを行った。その結果、一八八八年には木材資源を保護することを目的とした半官半民の機関が発足し、いくつかの大規模な州有林が成立した。彼らの主な目的は鉱山採掘に必要な木材の確保であったが、一八九〇年の国立公園指定の請願時には、その意図とFNCVの自然保護の意向が一致したため、政府はこれを承認し、国立公園の成立を約束したのである。

オーストラリア人のための自然風景

一八八〇年代には、オーストラリアの経済成長を背景に、物質的な豊かさを満たした市民の間で、精神的な豊かさを求める風潮が高まっていた。自然コラムの連載や、ハイデルベルグ派と呼ばれる郊外の自然をそのまま描く風景画の流

行は、この時代を象徴している。オーストラリア人にとって、土地開発から逃れた大規模州有林や、ウイルソンズ・プロモントリーなどの自然は、国を代表する動植物や風景を保持する場所として、重要な存在と考えられた。また、一九世紀後半のオーストラリアの人々は、多くがイギリスやヨーロッパからの移民であるため、故郷の風景が心に根強く残っていた。ウイルソンズ・プロモントリーの、イギリスと似た岬の風景という特徴もまた、人々に「オーストラリア人の公園」として受け入れられた理由の一つと考えられる。

まとめ

このように、イギリス流の土地利用や風景観に、原生自然の美的価値や動植物の保護といったアメリカからの自然保護概念が流れ込み、その気運の高まりから生まれたのがこの国立公園である。多くの動植物が生息する大面積の保護地域でありながら、遠く離れた故郷を懐かしく思わせる海岸風景をもち、レクリエーション利用も目的の一つとされた。これらは、従

来の多目的利用というイギリス的コンセプトというよりは、大規模面積を政府の土地として指定し、動植物の保護とレクリエーション利用の二つを目的とするアメリカの国立公園の理念が見てとれる。しかしながら、保護と利用という明確な軸を国立公園の管理理念にもち込むことはできず、指定後も産業利用は続けられた。従って、このウイルソンズ・プロモントリー国立公園は、現代で言うところのアメリカとイギリスの国立公園理念の折衷型であるといえるだろう。

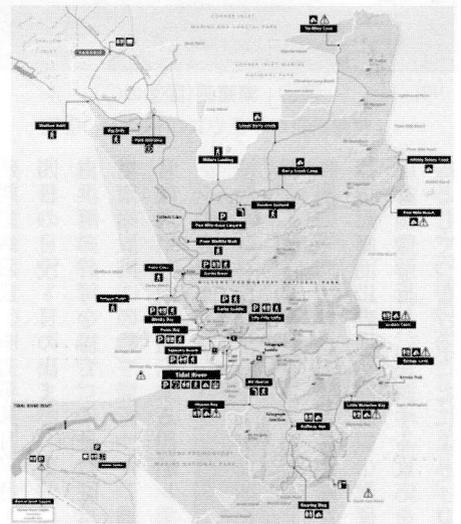
今後の課題

グレゴリーがいつ、どのようにアメリカの national park の概念を入手したのかという点については明らかではない。彼自身が渡米したか、あるいは FNCV や、王立協会のメンバーから情報を集めたか、具体的な記録は特に見当たらない。

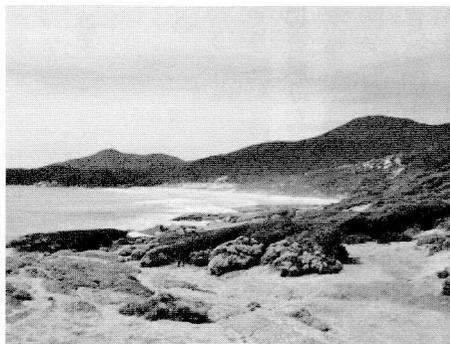
だが、当時の関係者の中に実際にイエローストーン国立公園を訪れた者や、その影響を受けたと思われる者は存在した。まず、FNCV の請願を聞き入れた土地大臣

のジョン・ダウ。彼はジャーナリスト時代の一八八三年に灌漑を学ぶためにカリフォルニアを訪ね、イエローストーン国立公園とグランド・キャニオンを訪れている。

自然コラム作家の通称ヴァガボンドは一八八三年のコラムで、ニュージールランドのワナカ湖上の美しい島々を、アメリカのヨセミテやイエローストーンのような national park にして破壊から守ることが良いと述べている。このほかにも当時の新聞記事の中に national park や Yellowstone などの言葉を見つけたことができ、国立公園の存在自体は一般の市民も容易に知ることができたと考えられる。ウイルソンズ・プロモントリー国立公園の成立に影響を与えたと考えられるアメリカの国立公園理念はどのように入ってきたのか、具体的な経緯の究明は今後の課題としたい。



Wilsons Promontory National Parkの地図



Squeaky Beachの南の崖から北西を望む

川辺 太郎 ●かわべ たらう
二〇一七年江戸川大学社会学部現代社会学科卒業。在学時には世界の国立公園制度を学ぶ。サークルでは霧ヶ峰自然保護指導員に加わり、自然観察会の企画を担当。